

病と風

東 辻 保 和

目次

- (一) 横風乃 尔布敷可尔 覆來礼婆
- (二) 本邦文献に見える「風」熟語
- (三) 中国関係医学書における「風」熟語
- (四) 纏め

(一) 横風乃 尔布敷可尔 覆來礼婆

万葉集卷五(九〇四)に次の歌がある。

男子名は古日に恋ふる歌

……何時しかも 人となりいでて 悪しけくも 良けくも見むと 大船の 思ひ頼むに 於毛波奴尔 横風乃 尔布敷可尔 覆來礼婆 せむすべの たどきをしらに ……

この歌の傍線部「横風」の訓み方については、契沖『万葉代匠記』精撰本に「よこしまかぜ」と訓まれて以来、今日までそれが大勢となっている。この辺の事情については、小関清明氏『男子名は古日に恋ふる歌』の「横風」について』

(高知大國文第十号、昭和五四年)に詳しい。小関氏は「横しま風」を「わろき風」と解し、「わろき風」が病氣の原因であるとした契沖の説に従い、「わるい風が覆いかぶさって来た(そのために古日が病氣になった)ので」と解すべきであろうと思う」と述べられた。その上で、「横しま風」はきわめて素朴な原始的な觀念であつて、日本に自生の考え方であると見られる。これに中国医学の哲學的な概念をあてはめるだけでは、解釈として正確さを欠くことになるであろう。『医心方』によると、中国医書には、『風邪』のほか『風毒』『惡風』など、類似の語がある。『横しま風』がもしこれらの翻訳語であるとすれば―これもあり得ないことではなからうが―、契沖の説明は全くただしいこととなるが、しいてそのように解する必要があるまい。一人の庶民の心で歌われた歌という見方からも、哲學的な翻訳語はふさわしくないであろう。」として契沖説を批判された。

「横しま風」は、他に用例の見当たらない語とされる。但、「横」には「ほしいまま、いわれもなく、不条理に」「よこしま、道理に反する」「おもいがけない」(『角川大辞源』)等の意義があるとされ、明月記には次のようにこの字義に合う用例もある。

廿六日、同巷説云、昨夕時成朝臣逢横災被刃傷云々(元久二年六月廿六日)

又、「よこしま」と言えば、直ぐに「邪」を連想するが、「邪」をヨコサマ・ヨコシマと訓じたことは、石山寺蔵沙彌十戒威儀経平安中期角筆点、龍谷大学善本叢書七卷本字鏡集、十卷本伊呂波字類抄等によつて認められよう。「風邪」「邪風」は中国医学書に頻繁に用いられているのであるから、契沖が「横風」を「邪風」に結び付けて、ヨコシマカゼと読んだとしても、不思議はないであろう。

(二) 本邦文献に見える「風」熟語

表記が横風であれ邪風であれ、病氣を表すのに「風」を用いる所に注目されるので、本節では、概ね平安・鎌倉時代

に限定して、本邦の資料から「風」を構成要素とする熟語を取り上げてみることにする。

その場合、最も多く目に付くのは「風病」である。これをカゼノヤマヒ（続日本紀宣命・第五十九詔、宣長訓のほか）と訓読するか、或いはフビヤウ（源氏物語ほか）と音読するかについては、一々の場合に必ずしも明瞭でないが、とにかく最も多く現れる。この状況については、既に服部敏良博士が『王朝貴族の病状診断』（吉川弘文館・昭和50）において指摘していられる。又、服部博士は、それに先立って「文学及びその他の文献に現われた疾病の解説」（『平安時代医学の研究』限定板、桑名文星堂・昭和30年4月）を發表していられる。拙稿での引例がそれらと重複する所があるが、止むを得ないこととお許し頂きたい。

而尔嘉政頻闕_三天下不得治成。加以元来風病_二尔苦都身体不安（第五十九詔）

頭風 魏志云太祖苦頭風（倭名類聚抄・卷三病類第四十、名古屋市立博物館本廿卷系統本永祿九年写にはツフウと読仮名がある）

東宮女二宮、男四宮御着袴、風病発動遅参間、（御堂関白記、寛弘四・十二・廿六）

今除目儀、従内退出、参中宮、右大臣被来、有被示事、其後風病発動、心神不宣（同、寛仁二・正・廿五）
日来風病発動、今日依宜、参太内并中宮、退出、（同、寛仁二・正・卅）

入夜宰相来云、関白御消息云、風病未愈、夜間相試猶如今者明日直物不可参（小右記、万寿二・三・十二）
従昨痢病発動、今日有減、風病所致也、恆盛占云、無祟、風氣也者（同、万寿四・五・十九）

こゑもはやりかにていふやう、『月ころふびやうおもきにたえかねて、ごくねちのぎうやくをぶくして、いとくさきによりなん、えたいめむたまはらぬ(源氏物語、帚木・六十一)』*博士ノ娘ノ詞トシテ引用サレテイル部分。

たゝこの法華経に結縁の心ざしのふかくてなんこのきぬ(衣)は風病のおもきになさけなくしあつめて侍べるをわかちたてまつるなりとの給はせて(栄花物語、卷3廿三、十七丁16)

としごろの風病ことほり申してまかりさりぬべかめりと申給(同、卷廿三、十八丁4)

身体ヤスラカナル事風病ヲノソクトイタミヒルムコトヲノソク(三宝絵詞・下13オ8、詞)

応徳二年二月廿九日、甲子、除目今日延引、左大臣依風病之故也(後二条師通記・上)

寛治六年十一月一日、(略)参入堂中、面當風如氷、仍即帰宅、現在風病発動、猶可陳状金山者也(同、中)

寛治六年十二月十七日、(略)又惟信朝臣来云、件事一定也、風氣小宜、明日吉日也、可参之由有御氣色(同、中)

寛治七年三月十日、(略)皇太后宮権大夫自暁拂乱風発動、不能参入延引云云(同、下)

道如、年六十一ニシテ俄ニ風病ニ値テ、一月余ヲ経テ死ヌ(今昔物語集・卷六、第三七・105-112)*原典「頓中風疾」

持経者ノ云ヒ出ス様、「極テ風ノ病ノ重ク候ヘバ、近来蒜ヲ食テナム」ト(同・卷十二、第三五・191-9)

阿難ノ思ハク、「我レ何テ舍利弗ニ勝ム」ト思テ、仍ニ風ヲ病テ臥給ヘリ(同・卷三、第六・209-12)

八日丁亥晴、密々有和歌連歌等、不出行、(中略)又云、自昨日主上聊頭風氣御(中略)又御頭風事、聞驚不少(玉葉

承安五・七)

九日(中略)余布施中間起座退出、大風之間、頭風發動之故也(同、承安五・三)

十七日(中略)昨今女房聊有頭風之氣、仍相慎之(同、承安五・六)

七日(中略)自今日所止湯也、慎風冷同前(同、承安元・十)

十五日(中略)晚頭、參院、建春門院、此兩三日御風氣御座云々(同、安元二・正)

五日(中略)今日、叙位儀也、下官欲參仕之間、自己刻許、風痺發動、及未時殊以倍增(同、承安三・正)

廿八日(中略)自今朝風痺發動、寸白更發(同、安元二・七)

五日(中略)明日難參入之由達闕白了、依風病灸治也(同、承安四・三)

二日(中略)中御門中納言被來、風病不快、隔簾謁之(同、安元二・八)

三日朝陽快晴(中略)心神猶不似例、仍返遣僮僕等了、猶依有風疑、申時計沐浴(明月記、建久九・正)

七日天晴、晚更掃落(中略)賴基申御風脚氣由、而不被用云々(同、正治二・十二)

廿一日、天晴、内大臣殿自昨日御風氣之由聞之、午時許馳參(同、建久七・六)

廿五日、天晴、雪霏、風氣總猶不宜、肩已下有中風氣(同、建永元・十一)

三日、陰雨、殿下昨日御不豫之由今朝聞之、(中略)召医家等、有御中風氣之由申之(同、正治二・八)

十四日、天晴、咳病更增、無為方、腹病風病計会、是物詣之水之所致歟、沐浴平臥(同、建仁元・十二)

十九日、晴陰不定、雨雪風寒、(中略)入夜退出、猶行嵯峨宿、寒風如嚴冬、風病更發(同、元久二・二)

殿下依御風病更發不參御(猪熊閑白記、正治元・十二・三)

殿下御坐簾中、御風病之故也（同、正治二・正・十九）

余自今朝風病更發、仍不見物（同、建永元・四・廿二）

於五辻入御之後余退出、依有風病氣也（同、建永元・十・廿三）

依風病更發、不參最勝講也（同、承元四・五・十三）

奉書每月心經一卷、已時許參内、自昨日御風氣御坐也（同、建曆元・二・廿八）

此日始北斗拜精進、而俄有風病氣、仍止了（玉蕊、承元五・三・六）

仰可參除日執筆由、依風病不調（同、承久三・正・九）

撰政來、入道相国、二條中納言來、風（問丸）病發事（同、文曆二・二・二）

天陰、時時小雨、女房聊有風氣、近日留布事云々、是咳病歟（同、承久二・正・十二）

而前日俄依御風氣、院不可有御幸之由被仰下也（同、承久二・十・五）

所惱聊有減氣、但雲氣未散之上頭風甚重（同、建曆二・二・廿四）

小雨間灑、予自夜聊惱氣、春風歟（同、承久二・正・十）

夕向武州許、入夜掃、有風氣、心神頗違乱（岡屋関白記、寛元四・二・十八）

降雨、今夜有風氣、以聖算拜北斗、如去十七日（同、寛元四・閏四・廿二）

天晴、入夜參内候直廬、為勞風氣不參上（同、寶治二・閏十二・六）

鷹司院自昨日有不例事、風氣、顔面并身頗腫給、入夜退出（同、寶治二・閏十二・二）

天晴、左大臣自今朝聊有風病之氣云々（同、寛治二・十二・廿一）

晴陰不定、風頗吹、微雪紛々、欲院參之處、依風氣令止了（深心院閑白記、文永三・十二・廿五）

此公經院ノ近習奉公年ゴロニモナリシカバ、ヤウヤウニ申ツ、中風ノ氣有シカバ、実宗公内大臣ニナリニキ。（愚管抄卷第六、308—3）

以上は、大略成立時代に沿つて、又、「風」熟語に限定して配列したものであるが、病氣を表すのには右以外に、「風」が単独で用いられた事例もあるので、次には、それらを掲げることにする。

「あないとほし。物の積かとも。典薬のぬし医師なり。かいさぐらせ給へ」といふに、たぐひなくくし。「何ぞ。

風」にこそ待らめ。医師入るべき心地し侍らず」といへば（落窪物語・卷之二、111—117）

板の上に夜中まで立ちゐ、戸をあけ侍りし程に、風引きて、腹のこほこほと申ししを（同、卷之二、123—2）

もとより御風おもおはしますに医師共の大小寒の水を御ぐしにいさせ給へと申ければ（大鏡、六十七代三条院、23—5）

十三日、甲申、雨降、去十一日夜院御風御坐、人々昨日所參也（後二条師通記、康和元・六）

三日、丙申、晴、殿下御風何様御坐、依御物忌不能參入（同、應徳二・三）

余依慎風、隔障子所談也（玉葉、承安元・十・六）

佛ノ御弟子、舍利尊者ノ風ヲ療治セムカタメニ、蓮花根三兩コハムトテキタルナリ（法華百座聞書抄才91）

以上掲げたように、古典文学及び古記録には多くの病氣の記録が見られるが、元よりこれがすべてではない。このほかにも呪術、宗教的信仰等に基づく治療の記録などがあるが、古代・中世で最も目を引くのは、「風」を構成要素とする

熟語の使用であり、中でも「風病」の多いことである。服部博士の述べられたところを改めて認識した次第である。そもそも古代・中世における「風病」や「風」とはどのような病気であったのか。服部博士の『王朝貴族の病状診断』によれば、次の四項が挙げられている。

①中枢神経系統に属する疾患の症状。現在の「中気」「中風」に当たる。②末梢神経系の疾患 ③リュウマチス性疾患
或いは脚気の如きもの ④現今の風邪（感冒性疾患）

又、榎 佐知子氏の『今昔物語と医術と呪術』（1993、築地書館）には、「当時の風邪と呼ばれたのは時候はずれの風のこと、犯された場所（症状）によって名称が異なる。頭ならば頭風、足ならば脚気（あしのけ）、腹部ならば腹の中風となる。つまり、風病とは今日の感冒だけでなく、あらゆる病気が含まれていたのである。」（p.144）とあり、同じく榎氏の『日本の古代医術——光源氏が医者にかかるとき——』（文春新書1999）には、「『御風』『風病』は病名ではなく病因で」と説いていられる。

（三） 中国関係医学書における「風」熟語

本邦での「風」熟語について調べて行くうちに、古代中国の医学書における医学用語を調べる必要のあることに思い至った。それは、古代における日本と中国との文化交流を考えると、当然思いつくべきことであった。

そこでまず第一に、『病原論』を初めとして、古代中国の多くの文献を引用編集した『医心方』に現れる「風」熟語を索引風に掲げてみよう。

但し、小稿の筆者には、一々についてそれが病名であるのか、或いは症状を表すものなのかを識別する能力に欠けることを遺憾に思う。

〔1〕『医心方』（半井家本影印リオリエント出版社、1991）からの引用。順序不同。同一頁に複数例ある場合は一例

のみを掲げる。()内は卷一丁、a表、b裏を示す。

- 風病 (3-9 b) (19-36 b) 風寒 (3-26 b) (3-35 a) (5-24 a) (5-45 b) (8-31 a) (11-21 a) (14-18 b) (14-32 a) (15-43 a) (18-6 a) (23-28 b) (24-2 a) (25-19 a) (27-24 a) (30-19 b) (30-44 a) 風邪 (3-28 b) (3-37 b) (3-38 a) (3-40 b) (4-10 a) (4-11 a) (4-14 b) (4-17 b) (4-20 b) (4-22 b) (4-24 a) (5-2 b) (5-4 a) (5-12 a) (5-14 a) (5-23 b) (5-46 b) (7-1 b) (9-29 a / 32 a) (10-1 b / 10 b) (10-32 b) (11-28 a) (11-43 a) (12-24 a) (13-9 b) (13-31 a) (15-40 b) (16-2 a) (16-14 a) (16-15 a / 16 b) (16-22 a) (17-12 a) (17-17 a / 18 b) (17-28 b) (20-16 b) (21-2 b / 3 a) (21-9 a / 9 b) (21-11 b) (21-28 a) (22-26 a / 26 b) (23-31 a) (23-34 b) (23-36 a) (23-41 b) (23-45 a) (25-24 a) (25-52 a / 53 b) (25-60 b) (25-62 a) (25-68 b) (27-25 b) (28-26 b) (30-41 a) (30-50 a) 風氣 (3-31 a) (3-33 a) (3-37 b) (8-22 a) (8-24 a) (14-20 b) (17-2 a) (18-7 a) (23-32 b) (25-63 b) (27-25 a) (27-30 a) (30-5 a) 風氣腫 (25-66 a) 風搔隠軫・風痒 (カザホロシ) (3-33 a) (3-34 b) (16-2 a) (25-64 a) (27-14 b) 風癩 (3-38 b) 風湿 (4-12 a) (8-2 a) (8-10 a) (10-35 a) (15-34 a) (17-7 a / 7 b / 8 b) (17-20 b) (19-12 a) (21-7 a) (25-24 a / 25 b) (25-27 a) (25-39 a) (25-69 a) (25-72 a) (30-51 a) 風湿之氣 (17-26 b) 風冷之氣 (4-16 a) (11-6 a) (25-35 a) 風冷 (30-19 b) (30-30 a) (30-38 a) 風聾 (5-3 b) (5-4 b) 風熱 (5-5 a) (5-6 b) (5-17 b) (5-18 a) (5-22 b) (5-32 b) (5-42 a) (7-5 a) (8-11 a) (15-29 b) (16-10 a / 11 b) (17-1 b) (17-14 a / 17 a) (18 a) (19-12 a) (30-28 a) (30-48 a) 風熱氣 (4-13 a) 風毒 (8-2 b / 4 b / 5 a / 9 a) (8-22 a) (15-21 a) (16-11 b) (17-2 a) (17-22 a) (19-46 a) (25-65 a) (30-46 b) 風毒之氣 (25-36 a) 風熱毒 (16-11 b) 風毒腫 (16-11 b) 風腫 (5-19 a) (14-22 a) (15-13 a) (15-30 b) (16-9 a) (16-12 a / 12 b) (21-26 b) (23-31 b) 風赤眼 (5-20 a) 風眼 (5-22 b) (5-23 b) 風目 (5-24 a) (14-22 a) 風凍瘡 (5-23 b) 風冷 (5-28 a) (5-32 b) (6-4 a) (6-12 a) (8-24 a) (10-24 a) (10-31 b) (13-8 a) (14-38 a) (15-30 b) (16-21 a) (16-46 a) (18-5 b / 6 a) (21-12 a) (21-17 b / 19 a) (22-27 a) (23-31 b) (23-44 a) (23-45 b) (25-51 b) (25-55 a) (25-61 a) (27-15 b) 風齒痛 (5-44 a) 風齒疼痛 (5-44 a) 風齶 (5-45 a) 風咳 (9-2 a) 風體 (10-12

b) 風水 (10 | 28 b / 29 a / 30 b) 風水腫 (10 | 32 b) (17 | 1 b) (17 | 32 a / 32 b) 風水病 (10 | 31 b) 風弱 (13 | 5 a) 風汗 (13 | 19 a) 風声 (13 | 22 a) (19 | 13 b) (20 | 8 b) 風疝 (14 | 19 b) 風頭 (30 | 48 a) (30 | 51 a) 風癭 (16 | 34 b) (16 | 44 b) (16 | 45 a) 風矢 (17 | 18 b) 風温 (19 | 12 a) 風癩 (19 | 47 b) (25 | 47 a) 風瘰 (23 | 33 a) 風入 (25 | 47 a) (25 | 63 b) 風痺勞 (26 | 6 b) 風痺 (26 | 7 b) (30 | 4 a) (30 | 19 b) (30 | 30 b / 31 a) 風日 (26 | 24 b) 風噤 (30 | 13 b) 風頭痛 (30 | 13 b) 風擊 (擊力) (30 | 28 a)

中風 (3 | 9 b) (3 | 37 b) (3 | 40 b) (4 | 7 b) (5 | 27 a) (13 | 3 a) (15 | 30 b) (18 | 14 a / 19 b / 22 a) (19 | 46 a) (23 | 32 b) (23 | 33 a / 33 b) (23 | 34 a) (25 | 32 b) (27 | 30 a) (30 | 25 a) (30 | 37 b) (30 | 42 b) (30 | 46 b) (30 | 49 b) 惡風 (3 | 36 a) (10 | 31 a) (14 | 20 b) (14 | 46 a) (16 | 20 a / 20 b) (17 | 8 a) (19 | 12 b) (27 | 16 a) (27 | 19 a) 大風 (3 | 37 a) (5 | 9 b) (10 | 14 a) (16 | 3 a) (18 | 44 a) (23 | 32 a) (27 | 16 a) (27 | 32 a) (28 | 28 a) (28 | 31 b) (28 | 35 a) (28 | 36 a) (30 | 25 a) 頭風 (4 | 9 b) (19 | 36 b) (19 | 46 a) (27 | 14 b) (27 | 16 a) (29 | 4 b / 5 b) 頭風病 (27 | 14 b) (29 | 13 b) 癩瘍風 (4 | 19 b) 白癩風 (4 | 21 a) 傷風 (7 | 16 b) (16 | 20 a) (25 | 29 a) 毒癘之風 (8 | 2 a) 熱毒風 (5 | 20 a) 日久風 (5 | 17 a) 遊風 (13 | 5 b) (19 | 16 a) (30 | 20 a) 賊風 (14 | 2 b) (15 | 30 b) (15 | 31 a / 31 b / 32 a) 西南温風 (14 | 43 a) 暴風 (15 | 30 b) (24 | 20 a) 暴風湿痺 (30 | 27 b) 冷風 (15 | 31 a) (30 | 50 b) 餘風 (15 | 31 b) 熱風 (5 | 29 a) (19 | 46 a / 47 a) (30 | 5 b) 熱風病 (29 | 18 b) 虚風 (19 | 49 a) 柔風 (23 | 34 b) 當風 (24 | 6 a) (27 | 32 a) (28 | 48 b) (29 | 13 b) 八風 (24 | 9 a) 狂風 (28 | 18 a) 癩風病 (24 | 20 b) 面風 (27 | 27 b) 除風 (28 | 41 a) (30 | 49 b) 骨節風 (30 | 17 a) 攤緩風 (30 | 21 b) 百節風 (30 | 32 a) 寒風 (30 | 48 a)

(II) 『傷寒雜病論』(東漢・張仲景著、中医研究院編『傷寒論』中沢信三・鈴木達也共訳、1989年、中国漢方刊) からの引用。

卒然遭邪風之氣、嬰非常之疾、患及禍至、(略)

(注)「邪風之氣」…邪風の氣とは、古代における外的病因に対する総称であり、伝染病の病因も含まれる。「素問・天真論」に「靈邪賊風、避之有時」とあり、「賊風邪氣之傷人也、令人病焉」とある。

(Ⅲ) 『金匱要略』(張仲景著、鈴木達也訳、中医研究院編、1993年、中国漢方刊)からの引用。

若五臟元真通暢、人即安和、客氣邪風、中人多死

(注)「客氣邪風」…本条では異常な気候によつて生ずる風邪などを指す。

夫人稟五常、因風氣而生長、風氣雖能生万物、亦能害万物

(注)「風氣」…本条では単に風のみを指しているのではなく、風、寒、暑、湿、燥、火の六氣を言う。

(Ⅳ) 『黄帝内経素問』(『現代語訳・黄帝内経素問』南京中医学院編、島田隆司・庄司良文・鈴木洋・藤山和子訳、1997年、東洋学術出版社刊)からの引用。

虚邪賊風(上31) 八風(上81) 五風(上81) 八風癸邪(上81) 東風 南風 西風 北風(上83) 邪風(上125) 風厥(上150・中35) 風寒冰冽(上217) 八風五痺之病(上226) 八風四時之勝(上247) 風成為寒熱(上289) 久風(上289) 脈風(上289) 惡風(上297・中37・74・89・202) 風者百病之長也(上336) 病風者以日夕死(上365) 憎風(上397) 傷於風者(上478) 勞風之病(中37) 腎風(中39・217) 風水(病名、中40・222) 風寒(中47・75) 風寒之氣(中69) 風癰(中89) 風根(中123・209) 風氣・風寒・癘風(中146) 心風・脾風・肺風・腎風(中149) 風氣・風府・腦風・目風・漏風・内風・中風・首風・久風・腸風・泄風(中150) 故風者百病之長也(中150) 酒風(病名、中202) 病風且寒且熱(中288) 病大風骨筋重鬚眉墮(又、癘風・癩風とも呼び、大麻風病「ハンセン氏病」のことである。名曰大風)(中288) 風者百病之始也(中336) 耳中生風者(中410) 狐疝風(中425) 風氣(下22・65)

肺風疝(病名・脾風疝・心風疝・腎風疝・肝風疝(中426) 風傷肝(下51) 土位之下風氣承(下71) 風位之下金氣承之(下71) 風氣流行(下101) 風氣下臨・風行太虛(下192) 風濕交争(下232) 風化為雨(下232) 風燥横運(下244) 風熱參布(下256) 風濕相薄(下266) 風生高遠(下288) 風清氣切(下326) 風行惑言(下331) 飄風(下348) 風化之行也何如(下376) 風氣大来、木之勝也(下438) 夫百病之生也、皆生於風寒暑濕燥火、以之化之變也(下453) 諸風掉眩、皆屬於肝(下453) 諸風掉眩、皆屬於肝(下453) 諸暴強直、皆屬於風(下454) 八風苑熱(下484) 正八風之氣(下507) 赤風瞳翳、化疫(下577) 風厥(下579) 風生民病、皆肢節痛(下597) 風疫(下611)

中国医学思想における「風」の占める重要さは、上に引いた古代医学書からの「風」熟語の豊富さによって、概ね察することが出来るであろうが、一層明確には、『黄帝内经素問』の「風論篇 第四十二」によって知ることが出来る。今、「風論篇」の解題を引用してみる。

「風」は六氣の一つであり、能く五氣を統べる。ゆえに「風は百病の長である」という。風の性は善くめぐり、しばしば変わる。中風もその一つであり、変症もなかなか多い。それゆえ「風は百病の始である」ともいう。本篇で論じているのはすべて、風邪が身体に侵入して現れた各種の症状の研究であり、その診察方法にも論及している。

六氣は古代中国の宇宙観と言うべきものであつて、天地間に風・寒・暑・濕・燥・火の気が満ちており、それが化してあらゆる病気の素となり、中でも「風」が最も重きをなすと考えられたようである。

(四) 纏め

日本・中国ともに医学・医療において「風」を基本的な概念としていたことが明らかである。とは言え、中国における医学思想は、観念的で稿者には容易に理解しがたいものである。しかしながら、「風」熟語を彼此見比べる場合には、

双方におのずからの相違と類似とを指摘し得るように思われる。

即ち、日本側の文献に粗々目を通した場合に、見出せる「風」熟語としては、

風病(六四例) 風病氣(三三) 風氣(三三三) 中風氣(五) 風痺(五) 頭風(四) 頭風氣(三三) 乱風(三)

風疑(二) 風冷(二) 風脚氣(二) 風発(二)

を数えるに過ぎない。それに対して『医心方』には八二種を数えるのに比べると、其の差は非常に大きい。『医心方』がすべての医療分野を覆うように構成されているのに対して、日本側の日記・古記録・随筆の類の場合には、現実に病気の種類や病状もおのずから限定されたことであろうが、殆ど「風病」と「風氣」とに占められるのに対して、『医心方』に現れる「風病」の例は極めて少なく、「風氣」の現れ方の方が多い。しかもその両者を合わせても「風邪」に遠く及ばない。これは古代中国での「風邪」「邪風」が今日の風邪(かぜ)とは別のものであって、槿 佐知子氏の全訳精解『医心方卷四美容篇』(1997-9、筑摩書房・p78)において、

古代の医学では、風邪(邪風)は病氣の原因で、侵入した部分によって病名が異なる。この場合は頭風。

と説明されるような用い方がなされたからなのであろう。そのように考えれば、本邦の風病も、中国の風邪(邪風)の場合とよく似た事情にあったのではないかと思われてくる。

〔使用テキスト〕 玉葉・明月記については国書刊行会本の「第一」を用いた。その他、『大日本古記録』『日本古典文学大系』『続日本紀(新日本古典文学大系)』、公刊の語彙総索引を用いた。

本文中に記した槿 佐知子氏全訳精解の『医心方』(刊行中)外、粟島行春氏訳註『医心方 食養篇』(1997-2、東洋医学薬学古典研究会発行)から多大の学恩を蒙った。併せて感謝申し上げる。

(付記 1)

稿後に、一海知義著『一語の辞典・風』(1996、三省堂)を知った。参照すべき文献であるので記する。

(付記 2)

研究発表会の席上、小林芳規先生より御指導賜り、又、橋村勝明・三保忠夫両氏より教示を頂きました。心よりおん礼申し上げます。

(1999・10・30)

病

と

風